

2025年5月18日 復活節第5主日礼拝メッセージ

「私たちの帰る家」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 14章 1-11節

先週、以前から計画してきていた教会墓地の改葬手続きを行いました。大阪府・奈良県・和歌山県の3府県にまたがる大阪教区には、服部墓地と王寺墓地という2つの教区墓地があります。そして私たち久宝教会でも、それぞれに納骨ロッカーを所有して来ていました。もともとは服部緑地公園に隣接する服部墓地の方が古く、先に作られたこともあり、そちらを購入・利用していましたが、その後近くに王寺墓地が新たに作られましたので、そちらにも納骨ロッカーを購入して、日本コイノニア福祉会の関係者のお骨などが、多く納められて来ています。近年では遠方の服部墓地まで行っての墓前礼拝がなかなか出来なかったこともあり、皆で話し合っ、服部墓地の納骨されているお骨を王寺墓地まで運んでくる、いわゆる「改葬」を行うことにしました。そのために市役所を始め、あちこちに連絡をして、いくつもの書類を作り、順番にハンコをもらって手数料を払い、それをまた次の所に提出する、というようなことを行って、無事にお骨を取り出ししてることが出来ました。

毎年11月に行っている召天者記念礼拝の際には、先に天に召された方々のお写真を並べて、一緒に礼拝を行っています。その際も、私はお会いしたことがない方々がほとんどですので、写真に記されているお名前を見るしかありませんが、ご遺骨にいたっては、骨壺に名前がなければ、素人目には全く判別が付きません。それぞれの方がいつからいつまで、この地上を生きられたのか、誰と一緒に生きられて、どのような生き方をされたのか、など。お一人お一人の歩まれた生涯は、それぞれに唯一の人生だったはずですが、この地上での歩みを終えて天に帰られた後、残された亡骸は、灰となって、そしてやがては皆、土へと還っていきます。いつだったか、どなたかの葬儀の際に「故人を送って、後に残されるのは、故人の亡骸と人柄のみ」というような言葉を聞いたことを思い出しますが、人柄や生き様は異なれど、亡骸は灰となり、ご遺骨となってしまうと、見分けがつかなくなってしまう、諸行は無常といわれる所以かもしれません。

それでも、私たちが故人のご遺骨にこだわるのは何故でしょうか。それはきっと今は姿が見えなくなってしまったものの、故人が確かに生きたという証を求めるからではないでしょうか。2011年の東日本大震災の大津波の後、家も町並みもす

べてが壊され、流されてしまった跡で、それでもがれきの中、ずっとご遺体を探し続けておられる方々が何人もおられました。自分の子どもを探す作業をするために、パワーショベルなどの建設重機の運転免許を取得したお母さんもいたと伺いました。何か月も過ぎ、もう生きていないと分かっている、その人が確かにいたという証が欲しい、確かに一緒に生きていたという証が欲しい、ということだったのだろうかと思えます。そしてまた、今を生かされている私たちが、お墓参りや記念礼拝などを通して、残された人たちが故人を偲び、その生涯や人柄、自分たちとの関係を思い出す時にもまた、確かに一緒に生きた、というつながりが思い出されるのではないかと思います。

今日の聖書の言葉「ヨハネによる福音書」14章の冒頭 1-3 節は、よく葬儀の際に読まれることの多い言葉です。

「1 心を騒がせてはならない。神を信じ、また私を信じなさい。<sup>2</sup> 私の父の家には住まいがたくさんある。もしなければ、私はそう言っておいたであろう。あなたがたのために場所を用意しに行くのだ。<sup>3</sup> 行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたを私のもとに迎える。こうして、私のいる所に、あなたがたもいることになる」

「父の家には住まいがたくさんある」と言われると、まるで客室の多いホテルか、団地やマンションを想像するかもしれません。「どこでも空いている部屋を使っているよ」と言われているような感じでしょうか。しかし、2 節以降「あなたがたのための場所」という言葉が出てきます。これはクリスマスの日、大きなお腹を抱えて産気付き、陣痛に苦しむマリアを連れながら身を横たえる場所を探していたヨセフたちに対して、「ここはお前たちの来る場所じゃない」と断った宿屋の主人たちが言った言葉「宿屋には彼らの居場所がなかったのである」(ルカ 2:7)と同じ言葉です。

イエス様がこの言葉を語られたのは、いわゆる「最後の晩餐」の席で、いよいよこれから弟子たちと引き離されて、十字架につけられていく、というお別れの前の食事の席での、お別れの言葉、長い長い「告別説教」と呼ばれるお話の一部です。その席には 12 人の男性の弟子たちがいたようですが、その他にも女性の弟子たちも含めて、大勢の人たちがいたでしょう。そしてそのようにイエス様の周りに集まって来ていた人たちにとって、「ここはお前たちの来る場所じゃない」「お前たちが

いていい場所じゃない」という言葉は、これまでも何度も何度も耳にして来た言葉だったのだらうと思います。そしてそのような人たちに対して、イエス様は「あなたがたのために場所を用意しに行くのだ」と言われました。ずっと社会の中で除け者にされてきていた人たちにとって、この言葉はどれだけ嬉しい言葉、喜ばしいお知らせ、福音だったでしょうか。

また「父の家」という表現も、現代日本語の感覚ではあまり馴染みがないかもしれませんが、家父長制の古代イスラエル社会においては、そのまま「一族」「身内」「親戚」を表わす言葉でした。病気や障がいなどのために、家族・親族からも見放され、場合によっては追放されていた人たちにとって、「あなたも家族の一員だよ」と言って迎え入れてもらえたということは、大きな喜びだったでしょう。また親子の縁を切られ、勘当された人にとっては、自分が死んだ後にどこのお墓に入ることが出来るのか、それこそ野ざらしにされて捨て置かれ、呪われたままなのか、ということに気にする人にとっては、「大丈夫、あなたがたを私のもとに迎える」と言ってもらえたのは、大きな慰めであり、安心であったでしょう。

今日は『こどもさんびか改訂版』の 132 番「きみが好きだって」をご一緒に歌いました。ドイツ人の牧師・賛美歌作家であるアンドレアス・エバートが作詞作曲した賛美歌です。

1 ラララララ、ラララララ、ララララララララララ...

「君が好きだ」って 誰かぼくに  
言ってくれたら ソラ 元気になる

2 ラララララ、ラララララ、ララララララララララ...

「君は大事」って 誰かぼくに  
言ってくれたら ちょっと 度胸がつく

3 ラララララ、ラララララ、ララララララララララ...

「君と行くよ」って 誰かぼくに  
言ってくれたら ホラ その気になる

4 ラララララ、ラララララ、ララララララララララ...

「君が好きだよ 友だちだよ」  
イエスさまの声が 聞こえてくる

ドイツ語の原題は「こどもを勇気づける歌」だそうです。子どもを勇気づけてくれるものとして、「きみが好きだよ」と言ってもらうこと、「きみが大事だよ」と言ってもら

うこと、「きみと一緒に行くよ」と言ってもらうこと、そして「きみが好きだよ、友だちだよ」と言ってくれているイエス様の声が聞こえてくることだと、素直に歌っている賛美歌でした。しかし、それは子どもに限らず、大の大人であっても、長く生きられた高齢者の方であっても、みんな同じではないでしょうか。「誰かが認めてくれること」、「誰かから必要とされること」、「同伴者がいること」、そして「神様が助けてくれること」……、これらによって人は勇気づけられて立つことが出来る。逆に言えば、それらが無ければ、私たちはしっかりと自立することが難しい存在であると言うことでしょう。イエス様の言葉と振る舞いによって勇気づけられ、立ち上がる力を与えられた仲間たちが、その周りには集まって来ていました。

イエス様は弟子たちに続けて言われました。「こうして、私のいる所に、あなたがたもいることになる。私がどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」(3-4)。また「私は道であり、真理であり、命である。私を通らなければ、誰も父のもとに行くことができない」(6)。つまり、「父」と表現されている神と一体であるイエス様が行われた業、その生き様こそが、私たち人間の歩むべき「道」、真似すべき生き方であり、それこそが真の「命」をもたらす「真理」「真実」そのものであるということでしょう。イエス様がその身をもって示されたように、隣人の存在を認め、その相手を大切に、一緒に歩むというその生き様に倣ってこの世界を生きる時、私たちもまたイエス様と共にあって、時間を超え、歴史の中で人間が作り出してきた様々な制約を超え、命の源である神に連なる真実の命へと導かれていくのではないのでしょうか。

聖書の中にはまた、「われらの国籍は天にあり」(フィリピ 3:20)という言葉もあります。この言葉は有名で、それこそ墓碑銘としてこの言葉が彫られているお墓もたくさんあります。「私たちの帰る家」はどこにあるのか……。私たち一人一人の、すべての人の命は自分で作り出したものではありません。元をたどれば、自分の命も、隣人の命も、家族の命も、すべて命の源である神様から与えられたものです。それを人間の都合で右と左に分け、清いものと清くないものに分け、救われるものと救われないものに分け、一方には居場所を与え、他方からは居場所を奪う。そんなことが許されてよいのでしょうか。もちろん、そのようなことはありません。「私に従いなさい」と言われたイエス様が、その身をもって示された道を、私たちもイエス様と共にあって、一步一步力づけられ支えられながら、隣人を大切にする歩みへと、今日も歩み出していきます。